『東大のがん治療医が癌になって』

加藤大基・中川恵一著

放射線治療医（加藤氏）が、34歳でわが身に肺がんを発見した当初から闘病体験までを綴る。専門家の体験記だけに、治療法の選択や発病の原因、術後の症状などが、詳細に分かり易く解説されている。例えば、著者と同じ肺がんステージⅠAの場合、現在の標準治療は手術だが、子宮頸がんならば、放射線治療でも〝成績〟は変わらないため、手術は〝切られ損〟だとか。信頼に足る「がん情報」も得られる好著だ。

◎ロハスメディア・1575円